

沖縄の発展—南国の力いかす産業を

沖縄は今年5月に、日本復帰から40周年の節目を迎える。

復帰後の沖縄は、基地、公共事業、観光の「3K依存経済」と呼ばれ、ものづくりは弱かった。広大な米軍基地とそれに伴う事故や事件が絶えぬという、沖縄に極端に重く残る第2次大戦後の負担から脱する今後のためにも、産業の自立が必要だ。

いま、沖縄が恵まれる自然を生かし、世界市場も狙えると期待される企業が芽吹いている。

沖縄本島中部のうるま市のサウスプロダクトは海藻のオキナワモズクに目をつけた。モズクの種から光合成に働く色素たんぱく質をとり出し、太陽電池の材料にする研究を大阪市立大と進める。実用化の道のりは険しいが、発電の夢を育てたい。

亜熱帯にある沖縄は、海も陸も多種多様な生命の宝庫だ。未利用の資源や産業の芽になるものはふんだんにある。

沖縄本島北部の赤土はやせた土壌で、これまでパイナップルかサトウキビしか栽培できないと考えられていた。紅茶づくりを思いついたのは内田智子さん(45)だ。高級品「琉球紅茶」の生産に成功した。欧州の専門家から絶賛され、「沖縄ティーファクトリー」からフランスへの輸出が今月始まる。

日本の国内総生産(GDP)に占める沖縄の経済規模は比率0.7%。復帰後10兆円以上つぎ込まれた沖縄振興費の多くは公共事業に使われた。埋め立てによる県土の増加率は毎年、全国で1、2位を争う。

沖縄県は復帰後、石油備蓄基地を誘致し、うるま市の宮城島と平安座(へんざ)島の間を埋め立てた。住民は「金武(きん)湾を守る会」をつくり、激しく反対した。

その精神的支柱になったのが安里清信(あさと・せいしん)さん(故人)だ。「石油基地から入る金などは幻のようなものです。だが、たとえばモズクとなると未来にかけて、これは永遠でしょう。海の大切さを安里さんは語った。

備蓄基地はできた。だが地元の繁栄にはつながらなかった。古老が予言したように、モズクをはじめ、南国の恵みを生かすバイオ産業分野の技術などをさらに伸ばしたい。

もちろん、自然に由来する産品だけでは力が足りない。既存のIT特区など沖縄経済のために始まった制度を実際に地元の役に立て、足腰の強い産業の創出と雇用確保につなげたい。

沖縄の苦難に報いることは、沖縄戦や占領期を経て本土にとって誓約だったが、まだ果たせていない。基地問題の解決とともに、産業の発展にも力を合わせてあたる必要がある。

(2012年01月11日)